

ワンザとバローチ：東アフリカにおける南西アジア系ハムワタニー

村山和之 共同研究員・和光大学非常勤講師

はじめに

「異郷」⁽¹⁾ということばがある。故郷から離れた、別の土地という意味である。アラビア語起源で南西アジア世界に広く流布するワタンという言葉がある。「故郷」をさす。これまで私たちがパキスタンやインドで出会い、興味を持って訪ね歩いた人たちはみな、故郷から異郷へ渡ったり、異郷を故郷に選ぶという歴史をもっていた。南西アジアのアフリカ系部族⁽²⁾や外国からパキスタンの聖地巡礼を熱望するヒンドゥー教徒⁽³⁾、イランから東アフリカに定住したバローチ族など、越境する集団にとってワタンとは何であろうか。

2004年8月18日から9月3日にかけて、ケニアとタンザニアにおけるヒンドゥー教徒とバローチ族を対象に、資料収集と聞き取りを主体とした共同調査を行った。参加者は、立命館大学助教授の中村忠男と本研究共同研究員の村山和之である。

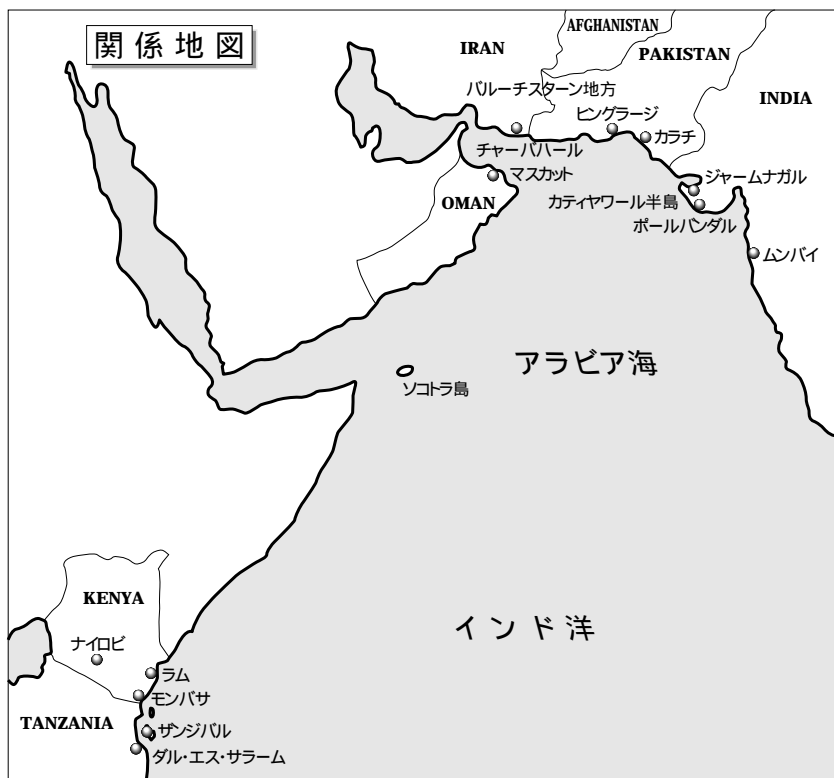
パキスタン・バローチスターン州の山中奥深くに位置する聖地ヒングラージに海外から巡礼するヒンドゥー共同体調査は、これまで西インド、ドバイそして英国において本研究メンバーによって行なわれてきた。今回はロンドンにおいて中村が収集した情報により、旧英領植民地ケニアにおけるヒンドゥー共同体、殊に「ワンザ」と呼ばれるジャーティ⁽⁴⁾に対する情報収集が不可欠であると判断し、東アフリカ海岸を訪問することとなった。ケニアのナイロビとモンバサ、そしてタンザニアのザンジバルとダル・エス・サラームの4都市において、ワンザ共同体を探し資料収集に努めた。

(1) ウルドゥー語でバルデーシュ *pardesh*、ヒンディー語でヴィデーシュ *videsh*。

(2) 村山和之 2005「スイッディー」『東西南北2005』、pp.66-90。

(3) 中村忠男 1997「ヒングラージ巡礼とパキスタンのヒンドゥー共同体」『象徴図像研究』vol.XI, pp.73-82。松枝到・東聖子 2005「西インド：女神の聖地を訪ねて」『東西南北2005』、pp.26-41。

(4) ジャーティ *jati* とは「生まれを同じにするもの」の意味。



さらに、アラブの影響を受けたスワヒリ文化圏でもある幾つかの港湾都市にはバローチ族（以降英語表記に合わせてバルーチ）の共同体がみられる。渡来時期はオマーン王国時代に遡るが、果たして今もイランやパキスタンに跨り横たわる故地バローチスタン地方と交流はあるのか、民族的慣習法を保持しているのか興味は尽きない。

こうして、異郷におけるワンザとバルーチという2つの「ハムワタニー」⁽⁵⁾、出自も渡来背景も異なる2つの共同体が、本踏査旅のめざす場所であり、出会うべき人々となった。南西アジアをここ数年来の活動拠点としてきた我々にとっても、インドまではともかく、アフリカは全くの異郷である。インド世界とどう違うのであろうか緊張は否めなかった。黄熱病予防注射をし、インドのムンバイでメンバーと落ち合ってからナイロビへの出発までの時間、あの時ほどインドをいとおしく感じたことはない。本稿は、一般的な観光名

(5) *hamwatani*: ウルドゥー語で、「ワタンを共有するもの、同郷の人、同胞者」。

所や野生動物が登場しないアフリカン・サファリ（旅）の小報告である。

1. ワンザ共同体を訪ねて

1 - 1. ワンザ共同体とは

まず、この旅の主要目的地であるワンザ共同体とは何かからはじめ、ケニアにおけるインド系移民共同体を宗教と民族によって分類した Salvadori⁽⁶⁾の仕事をも参照しながら、聞き取り調査の結果を紹介する。

ワンザ (Wanza) またはヴァンザ (Vanza) は、東アフリカにおけるインド系移民の中で早い時期に定着したヒンドゥー工職人からなる共同体の1つである。その成員は、グジャラーティー語を母語とするヒンドゥー教徒の仕立て屋そして織工からなる。非常に結束の固い共同体であり、その出自はクシャトリヤ (戦士階級) に遡る。では、なぜ彼らは戦士階級出身でありながら剣や弓矢を鉞と針と糸に持ち替えたのか。

ワンザ共同体の古伝承によれば、ヴィシュヌ神の十化身思想における第6番目の化身として現れたパラモン、パラシュラマ⁽⁷⁾の殺戮から生き残った数人の王子たちがワンザの先祖になるという。彼らは、守護神と崇めるヒングラージ女神 (Mata Hinglaj) に「クシャトリヤの本分である戦闘行為を放棄し、布を織る」と誓って命の救済を求めると、彼女はその願いをかなえてくれた。女神は王子たちをウジャイン市の南方に広がるヴィンディヤ山脈へと導く。その地で彼らは剣を捨て、糸の守護仙タントゥパール⁽⁸⁾の教えを受けて、平和を愛する織工と仕立て屋へとなっていった。

剣を鉞に持ち替えてからというもの、時がたつにつれ、彼らは益々繁栄し安定していった。そして、グジャラート地方西部のカティヤワール半島⁽⁹⁾の平野部へと移動して行く。ヴィンディヤ山から来た者として、それ故、ヴィンディヤの名が変形したヴァンザ/ワンザ、と呼ばれるのである。アラビア海に面した新天地カティヤワールに住み着いてから、彼らはさらに活動を広げてゆく。それは、太古の昔からこの地の名産品として名高い織物製品の質

(6) Salvadori, Cynthia, 1983, *Through Open Doors : A View of Asian Cultures in Kenya*. Kenway Publications. Nairobi. (Revised in 1989) 今回ナイロビにて入手した資料である。

(7) 「斧を持つラマ」を意味する。かつてクシャトリヤ族が世界を制圧した時代に、神々・パラモン・人類を守るためヴィシュヌは、クシャトリヤを全滅させる誓いを遂行するパラシュラマとして降臨した。

(8) *Sage Tantupal* (Protector of Threads)、針守タントゥパール仙」とも言うべきか。

(9) グジャラーティー語の原語表記では「カーティヤワール *Kathiyawar*」だが、本稿では、「カティヤワール」に統一した。

易である。ワンザの冒険者たちは、はるか海外の市場を求めてポールバンダルなどの港町から船出して行った。

東アフリカに最初に到達したワンザは、仕立て屋と織物商であったと考えられている。19世紀中葉にザンジバル島を訪問したリチャード・パートン卿は、ザンジバルにおけるワンザの存在を記している。Salvadori は、「確かな記録は無いけれど、ケニアに最初にやって来たワンザは、ザンジバルを経由して1880年代に到来したと思われる」としている [Salvadori, p.114]。もちろん、先駆者たちに続いてカティアワールから多数のワンザが海を渡ってきた、20世紀初頭の頃である。

ナイロビとモンバサに多く居住するワンザは、当初、ヒンドゥー同盟 (Hindu Union) という東アフリカにおけるヒンドゥー教徒団体の傘下に入っていた。しかし、各所でワンザ自らの組織を立ち上げる機運が高まり、モンバサで1925年、ナイロビで1931年にその先駆けとなる組織⁽¹⁰⁾ が生まれる。1941年、ナイロビにある2つの組織が合体し、バザール地区に独自の会館を持つシュリー・ワンザ・ユニオン (Shree Wanza Union) が誕生した。そして1940年代の中葉、ケニアのワンザ連合体が中心となって、近隣諸国のワンザに呼びかけ、東アフリカ・ワンザ協会 (The East Africa Wanza Association) を設立し、モンバサにおいて2回の大会を開いている。この協会の活動は現在停止していると思われる。[Salvadori, 1983] もそう書いているし、本現地調査でもその活動情報は得られなかったからである。

ナイロビのワンザは、1965年、現在でも治安が悪いバザール地区から離れ、市内マルンガ通り Malunga St. に土地を購入した。そして、募金活動の末、寺院とコミュニティーセンターの機能を併せ持つワンザ独自の会館建設に1980年から3年がかりで着手した。この会館は1983年4月に落成し、ケニア内からはもちろん、近隣諸国やヨーロッパ、インド本国から来賓を迎えてその誕生を祝った。我々が最初のワンザ寺院として訪問したのもこの会館で「Shree Wanza Temple」という名称である。この情報は後述する。

1 - 2 . ワンザ寺院を求めて

時間の限られた現地調査では、十分な下調べをしてから臨むことが必要だが、このテーマにおいての日本における情報収集は不可能であったといえよう。では、結果的にいかにして対象地を探しあて、ワンザ寺院に詣でること

(10) The Wanza Gnati Hittechu Mandal (Mombasa), Wanza Gnati Mandal & Wanza Yuvuk (Youth) Mandal (Nairobi), The Nyanza Wanza Gnati Mandal (Kisumu).

ができたのか。

今回、我々が現地において探索し訪問できたワンザ共同体の寺院は、ナイロビのシュリー・ワンザ寺院、モンバサのガーヤトリー寺院、そしてダル・エス・サラームのワンザ寺院の計3ヶ所であった。

ナイロビでは、インド人が営む書店で情報を聞きだし、Salvadoriの文献を含む参考書籍、現地版ガイドブックや地図をも購入し、場所の特定に努めた(図1)。ガイドブックは有用で、特に宗教別礼拝所の項には、キリスト教会やモスクと並んで寺院の記述があった。ヒンドゥー教、ジャイナ教そしてスィク教寺院がその中身になる。書店で教えられた寺院が位置する道路名を地図中にまず見つけ出し、その道に沿って点在する寺院の記号を確認して、捜索ポイントの見当をつけた。

ワンザ寺院の地区は治安が悪いと聞いたので、徒歩での捜索は諦めタクシーで横付けしてもらおう。当然、ホテルまでの帰路も同じタクシーを待たせて使うことになる。突然訪ねたシュリー・ワンザ寺院ではあるが、この会館の管理責任者兼寺院の司祭をつとめるマハーラージ⁽¹⁾と会って話を伺うことができた。2回訪ねたこの寺院では、グジャラーティー語の巡礼本(図6)をいただき、近年インドのカティアワールで建立されたヒングラージ寺院の情報を得た。さらに、モンバサでヒングラージを奉るガーヤトリー寺院のマハーラージは彼の兄君であることも教えていただいた(図2)。

モンバサでは携帯電話で兄君のマハーラージ氏と連絡を取り、2箇所の寺院を案内していただいた。モンバサ最大規模を誇るヒンドゥー連盟寺院 Hindu Union Temple と自らのガーヤトリー寺院である。だが、次の訪問地タンザニアのザンジバル、そしてダル・エス・サラームのワンザ共同体について、実際に交流が途絶えていて情報がないのか、突然現れた異国の訪問者を警戒したゆえから



図1 ナイロビ・シティーマーケット前

(1) maharaj は寺院の責任者にして礼拝指導者を指す呼称である。プージャラー *pujari* ともいう。



図2 マハーラーヂたち(左:ダル・エス・サラーム、中:モンバサ、右:ナイロビ)



図3 インド料理店(モンバサ)



図4 キストゥ通りのシャンカラ・アーシュラム寺院
(ダル・エス・サラーム)

か、マハーラーヂ氏からは何の情報も得られなかった。余談ではあるが、このたび初めてのインド料理店に入った。北インド出身の家族が経営しており、味はインドと変わらなかった(図3)。

ザンジバルでは3箇所のヒンドゥー寺院を確認したが、ワンザ寺院は無かった。しかし、同じホテルに投宿しておられたザンジバル研究の第一人者である宮城学院女子大学教授、富永智津子氏と偶然お会いして、新たな展開が始まる。ザンジバルとダル・エス・サラームにおけるインド系住

民の情報を教えて下さったからである。都合2日間しかないダル・エス・サ

ラームで、右往左往せずにすんだ事は、感謝すべき大きな収穫であった。よって、キストゥ通り Kistu St. のインド人街（図4）にある幾つかの寺院に迷うことなく向かい、ワンザ寺院の場所を尋ねられた。新しい住宅街の中にひっそりと建っているワンザ寺院を探しあて、司祭に会えたことは幸運であったといえる（図2左）。

さて、「ワンザのいるところにヒングラーヂ女神あり」といわれてはいるが、実際にそうであろうか。履物を脱いで、寺院内に足を運んでみねばなるまい。

1 - 3 . ワンザ寺院と共同体

ワンザ共同体の寺院あるところには、礼拝の中心となる神格と尊師が祀られている。ワンザの守護神ヒングラーヂ女神と尊師、グル・ゴーパーラール *Guru Gopalal* である（図5）。同じ祭壇に並べられて祀られる場合もあるし、個別の祭壇を持つ場合も認められる。

その他には、ヒンドゥー寺院では一般的ともいえるガネーシャ神、ハヌマン神、ドゥルガー女神、シヴァ神、ヴィシュヌ神、クリシュナ神等の神像や宗教画が大なり小なり祀られている。

ヒンドゥー教大伝承の中には座を持たないヒングラーヂ女神は、ワンザ共同体の礼拝すべき守護女神である⁽¹²⁾。前述した伝承からも、ヒングラーヂ女神はワンザの開祖に直接関係し、ある条件の下に彼らを命の危険から庇護する役割が読み取れる。逆にいえば、ワンザの系統がヴァルナ制度においてバラモンの次に高位にあたるクシャトリアであることを誇示するために、この伝承は大切に語り継がれているともいえよう⁽¹³⁾。



図5 ヒングラーヂ女神（左・中）とゴーパー・ラール（右）

(12) ナイロビのマハーラーヂ氏によると、ヒングラーヂ女神はワンザにとって「アーラドゥヤ・デーヴィー（*aaraadhya devi*）」つまり「崇拝に価する女神」であるという。

しかし、一方でワンザをパラシュラーマの斧から念入りに守るもう1つの巧みな装置が仕掛けられている。ワンザは肉を食べる戦士階級に祖を弑しながら、対極的な菜食主義⁽¹⁴⁾に食習慣を改めた集団でもあるのだ。菜食主義をワンザに促したのは、彼らがグルと仰ぐゴーパーラール師⁽¹⁵⁾その人である。

およそ500年前に南インドに生まれたゴーパーラールは、「雌牛と親しき者」を意味する。その名前が表すとおり、彼は熱心な菜食主義者であった。ゴーパーラールは菜食主義を広めながらインド中を放浪し、その旅の途上カティアワール地方のビハール村⁽¹⁶⁾にやって来た。その村に住むワンザの中に好意的な聴衆を見出した彼は、居を構え指導を始めた。月日が経つにつれ、ワンザは菜食主義に変わってゆき、ゴーパーラールを共同体の師：グルとして敬うようになる。肉を食べないクシャトリヤはいない⁽¹⁷⁾。肉食を辞めたワンザは、神々に対する動物供犠も同様に行なわなくなった。現在でも、ワンザが主催する供犠の供物にはその名残が見られる。通常捧げられるココナツの供物だけではなく、メロンも捧げられ、メロンはあたかも動物犠牲のように切断されているという [Salvadori, p.115-6]

その様々な宗教儀礼や通過儀礼の拠点となるワンザ共同体の寺院とは、いかなる機能を果たしているのだろうか。基本的にどの寺院でも大差はないのだが、ナイロビのシュリー・ワンザ寺院を例にとって見てみたい。

まず、日常礼拝の場所として、朝8時と夕方6時半にアーラティー⁽¹⁸⁾が行なわれている。マハーラージがアーラティーの聖句を唱えて、盆上の灯火をかざし、火を通して神々と礼拝者を対面させる。礼拝者は合掌して神前に歩み出て供物を捧げ礼拝する。神々に対する一通りの礼拝が終わると寺院は再び静まり返り、次のアーラティーまで礼拝堂または門の扉が閉じられる。

現在ナイロビには、183戸700人のワンザが居住している。彼らは皆、グジャラート各地の出身で、職業は95%が仕立て屋、残りはビジネスマン、銀行員、医師など様々である。ここでは18歳以上の男女全員が、年会費は1人600シリングでワンザ共同体のメンバーになる。共同体内の主な活動は福祉であり、冠婚葬祭や宗教的祭事⁽¹⁹⁾の中心地として、シュリー・ワンザ寺院は全ケ

(13) 現在のケニアでは廃れてしまったが、婚礼の際にワンザの花婿はクシャトリヤのようにターバンを巻き、長剣をさす習慣もあったという [Salvadori, p.116]

(14) 不殺生の食習慣ともいえる。

(15) パキスタンのヒングラージ寺院には、ゴーパーラールは祀られていない。

(16) The village of Bihal in Kathiawar [Salvadori, p.115]

(17) ワンザはクシャトリヤの主要成員であるラージプート族起源であるといわれる。ラージプート族は肉食（牛以外の動物肉）を行う。

(18) 灯火を仲介した神との謁見儀礼

ニアのワンザ共同体を傘下に置く位置にある。

また宿泊施設や図書館、小体育館を併設するこの会館は、毎週金曜日の夜7時から11時までは週末のクラブ活動で賑わう。メンバーは、この時間帯にカードに興じるのみならず、卓球やバドミントンそしてダーツを楽しめる。

最後に、ケニアからパキスタンのヒングラージに聖地巡礼を果たした人はこれまで何人ほどいるか尋ねてみた。ワンザに関しては全12人であるという。

その他の共同体メンバーも個人やグループで巡礼を試みるが、達成した人は本当に少数であるという話であった。母国インド・グジャラート州に里帰りすることはできても、インド国内のヒングラージ寺院やグル・ゴーパーールの聖地を訪問するだけである。パキスタンに最も近い位置にあるグジャラートとヒングラージの間には、政治的国境という深い断層が貫き、宗教的熱情を容易に通過させてはくれない現実が今も横たわっている。それでもなおワンザたちは、毎4～5月にパキスタンで行なわれる大祭に参加し、守護女神の故地を一目見んと、常に巡礼渡航に挑戦し続けているのだ(図6)。



図6 ヒングラージ巡礼案内書

2. バルーチ共同体を訪ねて

2-1. バルーチ族について

イスラーム教スンニー派を奉じるバルーチ族 *Baluchis*⁽²⁰⁾。その故地はイランとパキスタンに跨る砂漠地帯パローチスタン(バルーチスタン)で、北西イラン語系のバルーチー語⁽²¹⁾を母語とする部族集団である。生業は、半農半牧で海岸部では漁業も行なう。伝統的に商業を嫌い、肉体労働をより好むバルーチの中には、生来の好戦的気質から警察官や兵士、傭兵になる者が

(19) ナヴァラートリ *Navaratri* 祭はドウルガーを筆頭とした大女神を祀る(9～10月)。

(20) バルーチ民族の起源に関する考察は以下を参照のこと。

村山和之 2004「パローチ=クルド起源説考」『表現学部紀要04』pp.175-191. 和光大学

広義のバルーチ民族は、バルーチー語話者のバルーチ族とブラーフイー語話者のブラーフイー族 *the Brahuis* の集合体である。

(21) バルーチ *baluch* は民族名、バルーチー *baluchi* は言語名や形容詞

多い。そして、恥を意味する「マヤール *mayar*」という部族慣習法^②を尊重する。18世紀には、部族連合の代表としてパキスタン領バルーチスターンのカラートを都としたアフマドザイ朝カラート藩王国が、アフガニスタン南部からイラン領バルーチスターンまで広がる領土に君臨していた。

では、そんなバルーチの一派がいついかなる要因で、はるか東アフリカまで故郷を離れ、駱駝や馬ならぬ船に乗ってまで移住したのであろうか。

ケニア在住のバルーチには、渡来史を異にする2つのグループが見出せる [Salvadori, p.187]。第1のグループは、最初にアフリカの土を踏んだバルーチである。彼らは、17世紀にオマーン・アラブの傭兵としてスワヒリ海岸に上陸し、その後も移民を続けて現在に至る人々からなる。第2のグループは、19世紀末にインド方面から移民してきた「アジア人」のカテゴリーに属するバルーチである。どのグループも、それぞれの時代に、バルーチスターン本土から直接渡来していない点が共通している。

2 - 2 . 「アジア人」のバルーチ

ここではまず、前述した第2グループに属するアジア人としてのバルーチからその渡来の由縁を尋ねてみよう。

結果的にインドから移住してきたバルーチではあるが、彼らがバルーチスターンを故地とするバルーチ族であることは明白である。では、なぜ故郷バルーチスターンを離れてわざわざインド経由で、しかもインド人として東アフリカの地を踏んだのか。その理由は18世紀に遡る。様々な部族内抗争に破れ土地を追われたバルーチの一部は、東方へと落ちのびてゆき、インダス川を越えてグジャラートに属するカッチ地方 Kutch やカティヤワール地方へと到達する。そこで、バルーチは地方のムスリム領主たちに護衛や傭兵として職を得ることができた。この状況に伴い、彼らの母語であるバルーチー語も次第に薄れ、ウルドゥー語、シンディー語カッチ方言そしてグジャラティー語を話すようになってゆく。しかし同族内で婚姻を行なうバルーチは、自らの民族的伝統意識を保ち続けてきた。

バルーチの呼称は、一般的に彼らが居住する都市の名を冠してつけられていた。例えば、ジャームナガルのバルーチは「ナガル(都市)の」という意味でナンガリア *Nangaria* という。Salvadori は、あるナンガリアを通して東アフリカにおけるアジア人バルーチの歴史を綴っている [Salvadori, p.187-8]、

② 村山和之 2003「パローチ部族慣習法にみる「コウル」の概念について」『表現学部紀要03』 pp.149-166. 和光大学

最初にケニアへ渡ったナンガリア・バルーチは、ハッサン・ハーン Hassan Khan 氏であることが分かっている。突然ジャームナガルの藩主から会計職を解かれた彼は、1895年、弟とダウ船に乗りモンバサへ上陸した。当時、イギリスによる鉄道建設が始まっており、新天地での明るい未来を信じて家族を呼び寄せた。彼の妻、彼の3人の弟、彼の未婚の妹たち4人が、ハッサン・ハーンを頼ってインドからやって来た。身重だった妻が息子ラル・ハーンを出産し、ケニア生れの最初のナンガリアとなった。このハッサン・ハーン一族が、ケニアのナンガリア共同体で実質上主導権を握り現在に至る。

ナンガリアの共同体が営む同胞組織は、1910年に誕生し1973年に公式に政府に登録され、ジャームナガル・ベローチ・ジャマート(協会)²³と呼ばれる。この協会は、市内のトノノカ地区 Tononoka に自分たちの会館²⁴を持ち、メンバーの集会場所として宗教的祭礼や結婚式²⁵などが行なわれている。我々は、滞在日程の都合もあり、このナンガリア・バルーチ共同体についての情報は現地で何ひとつ得ることができなかった。

2 - 3 .「オマーン人」のバルーチ

マスカットを都とするオマーン王国が、東アフリカに勢力を拡大するのは17世紀に入ってからであるが、その歴史の先達を務めた功労者がバルーチであったことは意外と知られていない。現在、モンバサを中心に居住するオマーン系のバルーチは、海洋帝国オマーンが築いた輝かしい栄光の名残でもあるのだ。その歴史をバルーチ側の視点を尊重して振り返ってみよう²⁶。

インドへの新航路を開くべくヴァスコ・ダ・ガマは1498年、モンバサに寄港する。さらに1世紀後の1596年、ポルトガルはフォート・ジーザス Fort Jesus 要塞を完成させ、スワヒリ海岸地方の拠点とした。このとき以来、アラブの影響でイスラーム教徒が多かったこの地域に、キリスト教との本格的な対立が芽生える。強大な軍事力を背景に改宗を迫られ、モンバサのムスリムは、ポルトガルを駆逐するためオマーンに軍事援助を求める決議を採択した。オマーンも1507年からポルトガルの統治を受けていたが、1560年からはマスカットを奪還し、その支配を脱していた。

²³ Jamnagar Beloch Jamat

²⁴ Jamnagar Beloch Jamat Villa

²⁵ ナンガリアは内婚を固持してきたが、最近は英国など国外に移住する者が増えて習慣に変化が見られる。男性に限って、ナンガリア共同体以外の女性を娶うようになった。

²⁶ モンバサのオマーン系バルーチ共同体であるバルーチー・コミュニティ Baluchi Community の事務長であるナワーズ・ハーン Nawaz Khan 氏が用意してくれた資料による。



図7 ムテベ船（ザンジバル博物館蔵パネル）

かつてない大航海に、スワヒリ人にとって初めての試みではあったが、ムテペ *mtepe* というタイプの大型船をザンジバルで造船した（図7）。そして42人からなる使節団がムテベに乗ってオマーンに向け出港したのだ。海岸に沿って北上し、ラム

Lamu に寄ったとき、仲間が1人死亡し、代わりに水先案内人を雇う。艱難辛苦の果てにオマーンに着いた使節団は、首都マスカットに迎えられ、訪問の目的を告げて援助を請うた。スルタン（王）はスワヒリ人ムスリムたちの願いを聞き入れ、東アフリカ遠征を命じたのである。

ところが、第1次モンバサ遠征は惨憺たる結果に終わる。本国にはアフリカでの敗北が伝えられ、今後の作戦を協議していたとき、戦いに秀でたバルーチ族を援軍に送ってはどうか、との案が出た。この案は採用され、イラン側のバルーチスターン出身でオマーンに住んでいたバルーチ軍人、ミール・シャーダード・チョーター Mir Shahdad Chotah に白羽の矢がたった。バルーチ軍を組織したミール・シャーダードは、ジャマアダール *Jamadar*（司令官）となる。彼は1人でモンバサへ偵察に行き、要塞に投獄されたが情報をつかんで脱出し、オマーンに帰ると本格的遠征軍を立ち上げた。

こうして1664年、オマーン艦隊はバルーチ戦士たちを乗せて、モンバサを目指した。まず、ラムに上陸し、ポルトガル軍と戦いながら南下してゆく。ポルトガルに友好的であった都市マリンディ Malindi の攻防戦でも勝利をおさめる。モンバサ攻防戦では、ミール・シャーダードの愛弟アフマド・チョーターの戦死という悲報に見舞われながらもポルトガル軍に勝利する。地元スワヒリ人たちの支援を得ていたバルーチ軍は、ポルトガルが逃亡したモンバサの管理維持を担うことになる。

このように不測の偶然からバルーチは東アフリカへやってきた。この後、オマーンの影響下にバルーチの移動も活発となる。18世紀半ばからオマーンに派遣された太守ムハンマド・アルマズルイの一族が、本国^⑦と対立するようになると、再びバルーチ遠征軍が編まれる。1829年、ムハンマド・シャー

ホー Muhammad Shaho がモンバサ要塞の攻防に奮戦するも戦死、1837年にはタンガイ・ビン・シャンベ Tangai bin Shambe がマズルイ軍に勝利している。この2人の司令官もバルーチである。

1890年、モンバサが、オマーンを傀儡化したイギリスの東アフリカ保護領の首都になると、帰るべき国をなくしたバルーチたちは、この地に留まることを決意し今日に至るのである（図8）。

2004年現在、バルーチー・コミュニティ事務長のナワーズ・ハーン氏（図9）によれば、ケニアにおけるバルーチの総人口は凡そ2500人、そのほとんどがモンバサに居住し、ナイロビには40人弱が住む。みな、バルーチー語（イランのマクラニー方言）スワヒリ語

そして英語を使い分ける。ケニア人としてオマーンやイランにかつての故郷を思い、親戚を訪ねることもあるという。しかし、バルーチー部族慣習マヤールは完全に忘れ去られてしまったようだ。ただし、結婚式の際に歌われる特定のバルーチー語婚礼歌の伝統は、辛うじて残っているそうである。ムワゴゴ通り Mwangogo Rd. とマカダラ通り Makadara Rd. が交わる角に位置するバルーチー・コミュニティ会館の入り口には、大きくアラビア文字で表札が書かれ



図8 モンバサ市内



図9 コミュニティーでくつろぐバルーチたち（左端がナワーズ・ハーン氏）

⑦ 1828年にオマーンのスルタン：サイイド・サード Sayyid Said (1701-1856) は都をザンジバルにもおいた。1840年にはマスカットからザンジバルに本拠を移している。



図10 バルーチ・マスジッド（左は新しい建築中のマスジッド）



図11 バルーチ通り

ている^㉞。バルーチ
ー・コミュニティは
1963年に政府に認可
され、オマーン系バル
ーチ共同体の福祉事務
所の機能を担う。コ
ミュニティーの事業
として改築中である
バルーチ・マスジッド
(モスク)は(図10)、
会館からは公園を
間に挟んで

建ち、通りの名は、「バルーチ通り Baluchi St.」(図11)であった。

このコミュニティとは、今後も交流を続けながら、ナンガリア・バルーチやマズルイ族との関係史、そして僅かに残るといふ結婚式^㉞におけるバルーチ的民俗を、新たな課題として学んでいけたらよいと考えている。

おわりに

以上をもって、東アフリカという異郷に生きるインド人とバルーチ人を訪ねる旅の報告を終える。悲観的展望で出発したことを考えると、予想以上の成果に驚きを禁じえない。これらの成果は、ワンザに関しては中村を中心に作成中のヒングラーズ巡礼研究の最終報告書用データとして、バルーチ資料は大バルーチ民族史の中の一項目として活かしてゆく所存である。ケニア、

㉞ *baluch anjuman mamasa* バルーチ・アンジュマン・ママーサー「バルーチ協会連絡所」

㉞ オマーン系バルーチの女性は、非バルーチの男性(スワヒリ男性など)と通婚する。ナンガリアはその雑婚をきらう。

タンザニアで取材に応じてくれたワンザとバルーチたち、そしてこの旅のジャーナダールこと中村忠男氏に感謝したい⁸⁰。

(むらやま かずゆき)

⁸⁰ I, MURAYAMA Kazuyuki, wish to acknowledge the cooperation of the persons in Kenya and Tanzania, who welcomed our unexpected visit.

Maharaj Dharmesh Damji Joshi (Shree Wanza Temple, Nairobi). Maharaj Vinod Damji Joshi (Mombasa), Nawaz Khan Baluch, Mohamed Ismail (Mombasa). Prof. TOMINAGA Chizuko (Zanzibar). Maharaj Gautam G. Chudasama (Wanza Gnathi Mandal, Dar es salam). I also express my thanks to my colleague Jamadar NAKAMURA Tadao (Kyoto).